

## 米国の性意識、性行動及び性教育の動向と我が国の課題

楠本久美子・\*<sup>1</sup>江原 悦子・\*<sup>2</sup>岡田 潔

(平成16年9月30日 提出)

米国の過去100年間の性教育は宗教的発想と妊娠・性病予防時代を経て、第二次世界大戦後から約20年間は性解放に対応した性教育が優勢を占め、1970年代には「開放的性教育」「包括的性教育」「性教育保守派による性教育」がそれぞれの持論を展開してきた。1990年頃からはHIV感染予防と人権の尊重及び思いやりを基本とする「性の節制教育」プログラムが開発されるなど、新しい秩序を盛り込んだ教育が進められ、その成果も現れている<sup>1)</sup>。その結果、米国の若者の初体験は近年全体的に遅くなってきているが(米国CDC調査)、日本も含め、これからの性教育はもはや学校だけでなく、家庭、地域社会や文化と関連づけて研究、実施されなければならぬであろう<sup>2)</sup>。

### 1. はじめに

わが国では近年、中高校生の性交体験率が増加し、それに伴って若者の妊娠中絶数や性感染症の罹患率が急増している。一方米国ではこの10年間で高校生の性交体験率は54%から46%に減少し、4人以上の相手との性交体験者も19%から14%に減少している(米国CDC調査)。

そして、欧米先進国ではHIV感染者数・AIDS患者数も1993年から95年をピークに減少傾向にある。このような現実を見ると、わが国の性・エイズ教育のありかたについて、いま一度検討してみることが必要ではないだろうか。米国の性意識の変遷を振り返り、日本の今後の性教育の方向性を探る一助になればと考える。

### 2. 性意識と性行動の変化

#### (1) 性的罪悪感と恥じらいの時代

(1940年頃まで)

ビクトリア時代風の取り澄ました雰囲気の中かで育てられ、性的な心のときめきをおぼえただけでも罪であると教えられていた。もしも、思い

切って親たちに性についての質問をしたとしても、満足な答えをもらえることはめったになかった。そのころ、子どもたちは性的なことは無知であると考えられ、子どもが言葉や身体で性に関する当たり前の表現をすること - 見ること、感ずること、話すこと、触れることなど - すべてが処罰の対象になった。

マスターベーションはかたく禁じられていた。ビクトリア時代には、子どもたち、とくに男の子たちが自分で性器を刺激できないようなグロテスクな装具すら作られていた。

マスターベーションは知能の低下や狂気の原因と考えられ、生命の液を使い果たし、身体を弱め、寿命を縮めるものであり、不安で落ち着かない、緊張の強い状態をつくり出すとされていた。目の周りの黒ずんだ隈はひそかなマスターベーションの証拠と考えられ、また性器の刺激に用いられた手は、しだいになえて腐り落ちてしまうという、ひどい民話もつくられていた。

若い時代に教えられ、多くの老人が今でも信じているこうした誤った知識のなかでも重大なの

は、「過度な」マスターベーションは性的能力を低下させ、精液の「ストック」を減らしてしまうという考えである。精液は常に産生されており、精液が備蓄されなければならないと信じるのはまったくナンセンスなのだが、1945年編のボーイスカウト手帳もこれをそのまま受け継いでいる。その理由は、現在ほど確実で入手の容易な避妊技術の発達していない時代に過ぎて来たために自然発生的な性の楽しみが妊娠の恐れによって妨げられることも少なくなかった。また、まだ効果的な治療薬のなかった性病への恐れも当然ながら常に感じられていて、性に関する心理的な抑制効果を及ぼしていた。さらに、従来からの多くの宗教の教えもこれらを助長していた<sup>3)</sup>。

(キーワード：ピクトリア時代、マスターベーションの罪悪視、妊娠・性病の恐怖)

## (2) 古きよき時代の米国 (1940～1960年代まで)

夫婦と数人の子どもからなる家庭が、全体の70～80%を占めた古きよき時代の米国社会では、第1次産業(農林水産業)、第2次産業(工業)が中心の社会であった。人々は自然と調和のある生活を考え、大都市の自動車による大気汚染なども現在ほどではなかった。そこでは性の倫理面が重視され、ステディな性行動の時代であった。ポルノは禁止され、ピルも発売されてはいなかった。性的タブーもあり、制限された性行動の時代であった。離婚は少なく、健全な家庭生活が推奨された時代であった。

(キーワード：性の倫理面を重視、制限された性行動、ポルノ禁止、健全な家庭生活)

## (3) 性開放と混乱の時代

(1970年頃～1990年まで)

1960年代の終わりになると、欧米を中心に性開放の運動が広がった。そこでは、性器教育、性交、

避妊の性教育につき進んだ人たちもあり、その一方では、過激な性教育に反対する反性教育運動が高まった。この時代からポルノ解禁、ピル発売、そしてフリーセックスの風潮も広がった。ウーマンリブ活動や反戦運動も高まり、自己主張が強まった。その時代背景として、ベトナム戦争での敗北、米ソの対立と軍拡競争、第3次産業(商業・金融業・サービス業)の増大と女性の社会進出などが考えられる。人々は物質的欲望を満たすことに熱中し、現在の快樂の追求に夢中になった時代である。

(キーワード：ポルノ解禁、ピル発売・フリーセックスの風潮、性器・性交・避妊の性教育、ウーマンリブ活動)

### ・その社会的影響(その1)

マスメディアの快樂情報とコマーシャルイズムの拡大で、人々の欲望は肥大化し、快樂主義が拡大するなかで、十代少女の妊娠が増加した(米国では毎年100万人以上の未婚少女が妊娠していた)。そして中学・高校の中退者の増加と、ヘルペスをはじめとするSTD(性感染症)の蔓延、離婚の増加や未婚の母親の増加などの社会問題が発生した。

(キーワード：十代少女の妊娠増加、中高校の中退者増加、エイズ・STDの蔓延、離婚増加、未婚の母)

### ・その社会的影響(その2)

さらにポルノ解禁やフリーセックスの風潮は、家庭崩壊と家庭の養育機能の低下をもたらした。子どもたちは、家庭を飛び出し夜の街を徘徊するとともに、徒党をくんで盗み、暴力、薬物、タバコ、酒に走った。殺人、レイプ、暴力などの犯罪件数は日本の10倍から数十倍に達した。そしてエイズなどの増加は、医療費や社会福祉費の増加にもつながる。

## 米国の性意識、性行動及び性教育の動向と我が国の課題

(キーワード：家庭崩壊と養育機能の低下、犯罪増加、治安低下、医療・社会福祉費増加、税負担増)

### (4) 新しい秩序をもとめる時代(1990年頃～)

エイズの流行、ウーマンリブ世代の高齢化、経済不況などにより、これまでの生活に矛盾を感じる人々が増加した。米国と旧ソ連の和解、高度情報化社会の発展、自然環境の保護が話題になる中で、家庭のぬくもりと連帯感をもとめる気持ちが強くなった。このような時代背景の中で、欧米の性トレンドは大きく変わった。性交教育、性の快楽性のみを強調する教育は古いものとなった。性の精神面 愛、思いやり、エイズ患者との共存などを重視した性教育が新しいトレンドである。フリーセックスは過去のものとなり、ステディな性行動が見直されている。その結果として、エイズをはじめSTDがヨーロッパやオーストラリアでは減少している。経済不況、失業は社会不安の要因にもなっているが、その一方で、人々の連帯感を強め、健全な家庭生活と出生率の回復へと向かいつつある。“振り子は再びもとにもどり”つつある<sup>4)</sup>。

(キーワード：性の精神面を重視した性教育、ステディな性行動、エイズ・STDの減少、健全な家庭生活、出生率の回復へ)

### 3. 性教育内容の変遷

米国の性教育の歴史をみると、1900年代までさかのぼることができる。そこで40年ごとの1940年代と1980年代をとりあげ、ペンランド(L.R. Penland)<sup>5)</sup>の学説を紹介しよう。

#### (1) 1900年代の性教育

生殖のための性行為と、性に対する慎みの感情という、古い伝統的価値観を伝えるのが性教育の目的であった。男子に対しては、性の生理学や衛

生学をきちんと教えるべきであると考えられていたが、女子にはその必要はないという意見が支配的であった。ハイスクールの男子に対する性教育では、不必要に性器をいじることは害になる、不健全な性的関係をもつと病気になる、などと教えられた。

#### (2) 1940年代の性教育

全米学校長会が性教育に賛成し、性教育の必要性を主張する声が高まった。性教育では人の長期にわたる性的適応への援助が期待され、これまでの生殖や慎みといったことがらよりも、人間関係や人格の発達が重視された。ハイスクールでは生物、保健、家庭科(女子)を通じて行われ、その方法もスライドや映画を見せて、性病の実態とその害を説明するなど多面的になってきた。

#### (3) 1980年代の性教育

性教育はいつそう活発になったが、次のような特徴がみられた。セクシャリティは、人間生活で重要なものであることが認識され、男女混合クラスで性教育は教えられ、自由な討論がなされている。避妊の技術についても詳しく教えられ、自慰、同性愛、両性愛などに対しても、偏見のない議論がなされるようになった。

青少年が健全な性行動がとれる態度を育成することが、性教育の目標として強調されている。そして、精神的・肉体的にハンディキャップのある人にも性教育計画が用意されている。

|    | 1900年              | 1940年                 | 1980年                                       |
|----|--------------------|-----------------------|---|
| 傾向 | 性教育に反対             | 教訓的・道徳的               | 価値判断の多様化、個人主義的                              |
| 目的 | 性行動と性的欲情を抑制すること    | 家庭生活のための健全な性行動を奨励すること | 人の成長に役立つ健全な性行動を發展させること                      |
| 内容 | 性行為の危険、解剖学、生理学、優生学 | 家庭生活、生殖、性病「正常な」性行動    | 性表現のさまざまなかたちも、性行為、避妊法、生活形態、価値観と性行動          |
| 方法 | 講義法、限られた図書教材       | 講義法、討論法、図書視覚教材、映画     | 生徒の討論が中心、価値観の整理ロールプレイング、映画・模型などあらゆる種類の視聴覚教材 |
| 学級 | 少人数集団（男子のみ）        | ほとんど同性の学級             | 男女混合の学級                                     |

(Penland, 1981年より)

#### 4. 最近の性教育論争

武田敏<sup>6)</sup>によると最近の性教育論争は、次の3つの立場に分類できるという。

##### (1) 開放的性教育

アメリカおよびヨーロッパ諸国の開放的性教育推進者は、以下のような立場で持論を展開している者が多い。

- (A) 性は人の行動の中で最もプライベートな部分であり、相互に同意し、他者に迷惑をかける限り、自由である。
- (B) 価値観が多様化した今日の社会で、旧来の性道徳を行動規範とすることは矛盾が多い。
- (C) 性が開放されていることが民主的社会のあり方で、国家が個人の性生活を規制したり介入すべきでない。
- (D) 学校教育で、特定の価値教育を性に関して行うべきではない。性の生理学や保健学をサイエンスして教えればよい。
- (E) 弱者、少数派が性を享受する権利を保証すべきである。

開放派の主張にもとづいて、以下のような展開となる。

- (A) 性器や性行為に関し直接的ありのまま学習

する。

- (B) 性の快樂追求を権利として肯定する。
- (C) 性の二元化（快樂と生殖の分離）のため避妊教育を行う。

##### (2) 包括的性教育 Comprehensive Sex Education

米国性情報、性教育、性相談評議会は1964年性科学研究者により設立され、リベラルな性教育の立場で活動を展開している。包括的性教育を推進する代表的団体で、国際的影響力も大きい。包括的性教育は性に関する多様な価値観を容認し、相対主義のスタンスを取る。性行為は自然で日常的行為ととらえ、個人の自由な選択を尊重する。旧来の性道徳は価値観の押しつけであるとして、道徳的教育を否認する。性器の構造、生殖のメカニズム、性行為、妊娠と避妊、性感染症、同性愛、トランスセクシュアル等に関し、十分な科学的知識を与え、コンドームの使用、ピルの飲み方等に関しても行動を可能にする具体的情報を与え、スキルを学ばせる。若者の性行動を抑止する指導はせず、自ら判断して性行動を選択するようにすすめる。個人的にも社会的にも「性行為に対し準備ができてい」と自ら認められ、相好に同意があればしてもよい、という考えに立っている。「消

### 米国の性意識、性行動及び性教育の動向と我が国の課題

防車を整備充実すれば人々は安心し、火事の発生が多くなる」という事実はまったくないという。それと同様に「コンドーム教育、避妊教育を強力に推進すれば、若者の性行動がエスカレートする」という概念は誤りである。

#### (3) 性教育保守派による批判と主張

包括的性教育は価値観が欠落しており、価値意識によるコントロールがなければ「性欲、性衝動に流される性行動」となる、性器は自分のもの、性器の主人公は自分という考え方が「自分のものだから勝手に、どうしてもよい」という発想になりやすい、と保守派は主張する。

価値の明確化教育は「生徒が自分の価値を明確化できるように教師や親が助ける」教育であるが、性的にアクティブな若者には、この非指示的教育法では効果があがらない。それよりも、何が正しいか、誤っているかを明示した方がよいと提言している。価値の相対的提示をする教育方法も、かえって学習者を混乱させる、快楽充足や自分の都合だけが優先して「自己をスポイルしたり、相手の異性を傷つける」結果となるような性行動に陥る、性行動選択は社会的経験が豊富な成人でも困難な場合がある、性衝動が強く、分別が未熟な思春期の男女にこれを求めることは無理がある、性的刺激を受け興奮した状態で、冷静な判断をすることはむずかしいと分析している。包括的性教育が系統的に実施されている地域で、ハイスクール男女の性交体験率は低下していない。むしろ増加しているだけでなく、妊娠率、STD感染率も年々上昇している。コンドームを使えば予防できるというが、性交のたびに毎回必ず使う例は少なく、使わなかった時に妊娠したりSTDに感染する、またコンドームが破れることも決してまれでない。野球で3塁に進めば、ホームベースを踏む可能性が高くなる、と解している。

緊急避妊法として性交後に飲むピルが発売され、その避妊効果が高く「自覚症状としての副作用」は少ないとされているが、無計画、無責任の性行動を助長し、通常のピルよりさらに悪影響を及ぼすとみている。

#### 5. 我が国の課題

1970年頃から欧米を席捲した革命の嵐は、欧米社会に大きな影響を与えた。

ゆき過ぎた性開放と子どもの個人の権利と自己決定権を過度に主張する傾向は、その一方で家庭崩壊と児童虐待の増加を招き、「本当の意味での子どもの人権」を阻害していないだろうか。米国では大学内でもセクハラが多く、女子学生の15%が在学中にレイプに遭っているという。

性教育の先進国といわれるスウェーデンは、古いキリスト教の宗教的呪縛からの解放という立場から、ポルノ・未婚の母親・同性愛などにも寛容であり、性教育のモデルと賞賛されてきた。しかし近年は、ヨーロッパで小児愛や性暴力等の最も性犯罪率の高い国と批判されている。そして性教育内容も再検討されている。

わが国に入ってくる情報は、必ずしも大局的立場から正確に伝わっているとは言い難い面もある。米国では、「すべての学校で日本より進んだ、より性開放的な教育が行われている」と考えられ勝ちであるが、そうではない。例えば、ホルツマン<sup>8)</sup>の全米2,150学区を対象とした調査でも、小中学校におけるエイズ予防教育の中心は節制教育であった。「エイズ予防にはコンドームを」という即物的なコンドーム教育は小学校では殆どなく、中学校で30%、高校で50%であったが、「性の節制を教える教育」は、小学校高学年で50%、中学校、高校では80%に達していた。

2003年に行われた日・米・韓・中国の4カ国の高校生を対象とした意識調査の結果では、「結婚

楠本久美子・江原悦子・岡田 潔

までは純潔を守る」という女子高校生は韓国と中国では約75%、米国では57%であるが、日本は29%で最も低かった<sup>9)</sup>。わが国では、年々青少年の性開放、性自由化、そして性の商品化が進んでいるが、いま一度、マスメディアの姿勢と学校における性教育を再検討する時期を迎えているのではないだろうか。

## 6. 結語

米国民の性意識の変遷は国民の性行動や性教育、社会にまで大きな影響を及ぼしてきた。特にゆき過ぎた性開放は十代少女の望まない妊娠とSTDの増加及び、性犯罪の増加を招いた。その反省から米国民の性意識は変化し、自己中心的な快楽追及を衰退させ、人権尊重と異性に対する思いやりをはぐくむ方向へと移り変わった。エイズ予防教育に見る節制教育では、自己制御できる理性と知性、そして弱者と共存できる人間を求めているのである。

一方、日本では若者の性自由化が進み、先進国としては唯一、エイズや性感染症が増加している国でもある。日本は米国の新しい性教育が国民に受け入れられた意義をよく理解し、今後の性教育の方向性を早急に検討すべき時期にきているといえよう。

## [ 文献 ]

- 1) J.E.Barnett and C.S.Hurst ( 2003 ), *Abstinence Education for Rural Youth*, Evaluation of the Life7s Walk Program, ( J.School Health ) 73vols, 264 ~ 268
- 2) 内山源。性教育カリキュラムと検討事項。J. School Health ( 2004 ) 46巻 132 - 137頁
- 3) R. N. Butler and M. I. Lewis. *Love and Sex after sixty* 清水信訳、「60歳からの愛と性」社会保険出版社。( 1986 ) 116 ~ 119頁
- 4) 松岡弘。エイズ教育と性教育。東山書房 ( 1993 )

103 ~ 106頁

- 5) L. R. Penland, *Sex Education in 1900, 1940 and 1980 - An Historical Sketch* ( 1981 ) J. School Health, 51 ( 7 ) vols, 305 ~ 309
- 6) 武田敏。アメリカと韓国の性教育 ( 2002 ) 思春期学。第20巻、第1号、27 ~ 32頁
- 7) D. Holzman, et.al *HIV Education in United States* ( 1992 ) A National Survey of Local School District and Practices, J. School Health, 62 ( 2 ) vols, 74
- 8) ( 財 ) 一ツ橋文芸教育振興会。( 1994 ) 日本青少年研究所。高校生の生活と意識に関する調査

\*1 大阪教育大学付属池田小学校・養護教諭

\*2 大阪市立加美小学校・校長